

大学英語教育における通訳訓練法の考察

篠塚 勝正

Abstract

This paper discusses how difficult university students find different interpretation techniques, based on questionnaires completed by students with differing English levels, lower, intermediate and higher. There are primarily three interpretation techniques which were introduced for university students, namely "slash reading", "sight translation" and "shadowing".

I conclude that the appropriate techniques should be carefully designed and introduced according to student's English level, since one method might be too difficult for lower level students. Also, all three techniques can be used for intermediate or higher level students.

1. はじめに

近年、コミュニカティブ・アプローチによる英語教育が小学校から大学まで盛んに行われている。今後は、日本の公立高校においても、日本人英語教師が英語で授業を行うことが文部科学省により決定された。このことは、外国語である英語を母語と同じように音声から習得するといった言語習得法であり、文法も音声から自然に体得するべきものであると理解できる。今回の決定が果たして、英語学習者にとって更なる英語力向上に貢献するかは、今後のデータを待たなければならない。

筆者は、大学の授業で通訳訓練法であるスラッシュ・リーディング及び、サイト・トランスレーション、シャドーイングによる授業を積極的に導入している。つまり、英語から日本語に訳すことを念頭に置き、英語を英語で理解するといったコミュニカティブ・アプローチとは異なる。英語習得には母語

(日本語)での理解、解釈が必要であるという考えに基づいた授業である。すなわち、母語で英文を訳せることが、文法力や語彙力を含め、正確に英語を理解できているか否かの尺度として、スラッシュ・リーディング及び、サイト・トランスレーションを導入している根底の考えがある。両者の導入の方法は後述するが、一言で言えば、両者ともに、電光掲示板のように英語を頭から日本語に訳し、訳仕上げはしないという方法である。シャドーイングに関しては、通訳訓練ではないという意見も多く、第二言語習得の一部であるという考え(リスニング力向上のための訓練法と位置づける考え)も多い。ともあれ、上記の訓練法を、受講者が約一年間受け、各々の訓練法に対し、学年末の授業の最終日にどのような意見を持ち、どのような効果や受講者自身が改善すべき点に気がついたかを、筆者の受講者にアンケートに答えてもらい、そのアンケート結果を基に、それぞれの訓練法についての考察を試みたい。なお、受講者のレベルは、初級者(TOEIC 300点台)から上級者(TOEIC 700点台)とクラスによって異なるが、各々のクラスはほぼ同じレベルで構成されている。各々の通常の授業では、各々の受講者レベルに合わせたテキストを用い、主にスラッシュ・リーディング、サイト・トランスレーション、シャドーイングなどを導入して授業を進行している⁽¹⁾。

2. 大学における通訳教育の現状

ここ数年間で、学部レベルにおいても、特に英文科や英語学科などで通訳法の授業が導入され、全国の大学間の学部生による通訳コンテストも行われている⁽²⁾。筆者も学部3・4年次対象の通訳法の授業では勿論のこと、1・2年生対象の英語専攻でない一般英語のクラスにおいても、通訳訓練法を導入した英語学習法を取り入れている。とはいえ、通訳法などの授業の受講生も約80%は英語力向上が選択動機であり、また、彼らの英語力もTOEIC 560点までの受講生が約50%を占めているデータもあるのが現実である(田中, 2007)。このデータから、本格的に通訳者として通訳訓練を受けるレベルには到達していないことが分かる。実際に、通訳者になるための民間の通訳学校の初級コースに入学するためには、最低でもTOEICは800点以上、英検準1級程度以上というのが実情である。しかしながら、通訳訓練法によっ

て、受講者の中には、1年間でTOEICが100点以上伸びる学生や英検準1級合格者もあり、決して通訳訓練法が、学部レベルの学生にとって一概に難しいともいえないのではなかろうか。つまり、通訳者養成の教育としての通訳訓練ではなく、英語教育としての通訳訓練である。次の項では、筆者が具体的にどのような訓練を施しているかを、各々の訓練方法の説明と共に述べて行きたい。

3. 通訳訓練法

3.1 スラッシュ・リーディングとは (以下、SRとする)

SRは、チャンク・リーディング (chunk reading) とも呼ばれている。SRの特長は、以下の3つが挙げられる。①英文をそのままの語順で読み進めるので、従来の訳読式とは異なり、返り読みする手間が省ける。②意味の固まりごとに区切って解釈するので、学習者の長文恐怖症を軽減、克服するきっかけになることが期待できる。③文、節より小さい単位で読むので、集中力が持続する (檜山, 2007)。実際に、筆者が中級学習者の授業でSRで指導した一部を具体的に述べる。

まず、英文の意味のある固まりやの終わりに「/」マーク (slash) を入れていく。ピリオド (文尾) には、ダブル・スラッシュ「//」を入れる。例えば、Global warming is a growing problem/ in the modern world.// Average temperatures have been gradually rising/ along with increase in levels of carbon dioxide/ in the atmosphere.// のように、シングル・スラッシュとダブル・スラッシュをテキストに入れるように指示をする。切れ目「/」の箇所まで筆者が英語で読んだ直後に学生も同じ英語を読み、その直後に、日本語訳を筆者が「地球温暖化は、ますます大きくなりつつある問題だ」のように言う。その後も同様に、英語、日本語の順番で学生は筆者のあとについて、英・日の音読をして、全体のアーティクルが終了した時点で、ペア・ワークで互いに学生同士が交互に英語、日本語を確認しあう。その際、時間制限を与える (アーティクルの長さにもよるが、10分程度)。これは、学生が集中して訓練を行うためである。スラッシュ・リーディングはあくまで、文頭から訳仕上げしないことを念頭に置いた訓練であり、文法構造が異なる英語の語順で訳出

しているので、日本語が不自然なときもあるが、それは問題にしない。

具体的に、筆者の受講者合計 209 人（初級英語学習者：TOEIC 300 点台～中級 TOEIC 500・600 点・上級 TOEIC 700 点以上）から、最後の授業日に SR 訓練に対し、どのような感想を持ち、どのような効果があるかどうかなどをまとめたアンケートを基に、SR を考察したいと思う。なお、課題文は、全てのレベルで同じ題材を使用した。実際に、アンケート時に行った SR 訓練の課題文とそれに対応する日本語を以下に記す。

Lifetime employment has been a traditional Japanese employment system/
(長期雇用制度は、従来の日本の雇用制度である) for a long time//. (長い間)
Under this system,/ (こういった制度の下で) once you start to work for one
company, (ひとたび、あなたがある会社で働きはじめると) /you can stay
there/ (その会社に留まることができる)

until your retirement.// (退職までずっと)

This system had both merits and demerits.// (この制度には、良い面と悪い
面の両方があった)

The merits of the lifetime employment are as follows:// (長期雇用制度の良
い面は、以下である)

First, because employees can work without worrying about being laid off,/ (先ず、理由は、被雇用者は、働ける、心配をしないで、解雇される), they can
plan their futures better.// (彼らは、計画できる、自分の将来をよりよく),

Second, the longer they work for the company,/ (第二に、長くその会社に
働けば働くほど) the more loyalty they tend to show to their company.//

(彼らは、より忠誠心を、傾向がある、示す、自分の会社に) Long-term
employees are more likely to make contributions to their company/ (長期
被雇用者は、より一層、貢献する傾向にある、自分の会社に) in many ways.//
(さまざまな意味において)

先述の通り、筆者が英文を読んだ後、学習者は直ぐに、英文を見ながら、英文を音読する。その直後に筆者がその英文を訳した日本語訳を、学習者は同様に、口頭でその筆者と同じ日本語訳を言う。この場合、日本語訳は記載

していないので、筆者の日本語での output に学習者は集中して聞くことが余儀なくされることとなる。したがって、学習者は、筆者の日本語を聞くことに集中すると同時に（聴覚入力）、その日本語に対応する英文の両者（視覚入力）に集中し、最終的には日本語で口頭出力しなければならない。以上が、筆者の SR 訓練の手順である。

3.2 サイト・トランスレーションとは（以下、ST とする）

意味のまとまりのあるごとに、スラッシュを入れ、このまとまりを頭から順送りで声に出して訳出する同時通訳の前段階の訓練方法である。訳出した日本語は、第三者に理解可能であり、非文法的なものではないので SR と比較しても、脳への負担は高いだろう。なぜならば、Eye Span（視覚入力される長さ）は SR より長く保つ場合もあるので retention ability にも関係する。また書き言葉（～だ、～である調）でなく、話し言葉（～です、ます調）で訳出することにも意識しなければいけない。以下に、SR と同じ題材を ST で訳出した例を記述する。なお、四角括弧の部分は、Eye Span を SR より長くし、一時的に記憶保持しつつ訳出しなくてはならない部分であり、下線部は、話し言葉に変えたり、聞き手に理解が容易になるように、副詞などを付け加える箇所である。実際には、括弧も下線文もないものを使用し訓練をする（鶴田他, 2006）。以下は、実際に ST 訓練を行ったものである。

Lifetime employment had been a traditional Japanese employment system

for a long time.//

（長期雇用制度は、長い間、従来の日本の雇用制度でありました）

Under this system/（この制度の下では）

once you start to work for one company,/（ひとたびある会社で働きはじめますと）

you can stay there until your retirement.//（定年退職まで働き続けることができるのです）

This system had both merits and demerits.//（この制度には、良い面と悪い面がありました）

The merits of the lifetime employment are as follows: (長期雇用制度の
良い面は、以下のようなものが挙げられます)

First, because employees can work without worrying about being laid off /
(といたしますのも、先ず、被雇用者は解雇させられる心配なく、働くことができる
からなのです)

they can plan their futures better. // (したがって、自分の将来を明確に計画立
てることができるのです)

Second, the longer they work for the company, / (次に、長期に渡り働くにつ
れ)

the more loyalty they tend to show to their company. // (自分の勤める会
社により忠誠心を誓う傾向があるのです)

Long-term employees are more likely to make contributions to their
company in many ways //

(ですので、長期被雇用者は、様々な意味で自分の会社により貢献する度合いが高
くなる傾向があります)

以上のように、SR と比較すると、ST は一瞬にして品詞変換 (例えば、
S+V の部分を副詞的に訳す: Sources say は、「情報筋によりますと」、いう
ように副詞的に訳す) などを行い、第三者に理解可能な日本語に変換するの
で、一層難しい訓練となる。この訓練は同時通訳の前段階の訓練であり、英
文の文法構造の理解が大前提の訓練である。実際の授業では、SR 訓練同様、
筆者が英語部分を読み、その直後に全く同じ部分を、学生が英語の音読をし、
その直後、筆者が英文の部分を ST 用の日本語に変換し、その部分を学生は、
英文を見ながら筆者の日本語訳に聴覚的に集中しつつ、筆者の音声を一時的
に保持し、正確な話し言葉に日本語で口頭出力する。したがって、ワーキン
グメモリ (以下 WM とする: 保持・処理) への負荷度合いは SR よりも、同
時に行う作業が多いので、注意の分散 (attention spilt) の度合いも高いのは
明白である。したがって、このことから、SR よりも ST の方が、難しい
訓練であることは理解できる。

3.3 シャドーイング

近年、シャドーイング訓練は、大学のみならず、高校でも導入されている。シャドーイングにかんしては、言語変換が伴わないために、通訳訓練とはみなされない意見（染谷, 1996）もある。通訳訓練としてのシャドーイングの効果の是非に関して、強く通訳向上の効果があるとする立場（例：Lambert, 1991）と強く反対する立場（例：Selsekovitch and Leaderer, 1989）ときっぱり分かれている。Kurz (1992: 248) は、神経心理学の見地から、単一言語での反復では同時通訳と近似した状況とはならず、「これらの練習には決定的な要素、つまり、発話入力 of 能動的な分析が欠けている」と指摘する。

しかし、本論では、むしろリスニング力向上という側面を考慮にいれているので、通訳能力向上としてのシャドーイング訓練の是非に関しては、ここでは言及しないものとする。

シャドーイング訓練が、英語学習者のリスニング力向上に寄与することは、先行研究から判明している（玉井, 2005；篠塚, 2006）。以下に、シャドーイングの定義を記す。

Tamai (2005: 34) defines shadowing as “a listening act or task in which the learners tracks the heard speech and repeats it as exactly as possible while listening attentively to the incoming information”. つまり、学習者は、ネイティブ・スピーカーの音声に最大限注意を向け、出来る限りその音声に遅れないように着いていきながら、有声化する。なお、シャドーイングは、音声だけ真似て、内容は考えなくてもよいプロソディシャドーイングと、意味内容も考えるコンテンツシャドーイングがあるが、筆者は後者のコンテンツシャドーイングを行うことを促すために、毎回、学習者に「脳の中で英文を組み立て、正確に発音をし、同時に意味も考えながらシャドーイングをすること」と指示を出した。その理由は、コンテンツシャドーイングの方が、音声だけ真似て意味理解をしなくてもよいプロソディシャドーイングより、保持・処理作業が多く WM の負担は高いが、その分シャドーイングの効果（特にリスニング力向上）に貢献するのではないかと判断しているからである。

シャドーイングは、その行為自体から、短期記憶、WM、長期記憶に関係

するが、今回は記憶の部分に関しては触れないこととする。

4. アンケートの際のタスクの手順及び、題材

SR、ST、シャドーイング課題のアンケートには、全て 3.1 及び 3.2 の SR と ST の定義で述べた題材を使用した。アンケート回答者は、①初見のシャドーイング→②筆者の SR 後のシャドーイング→③SR 訓練→④ST 訓練の手順で行った。したがって、アンケートに関するタスクは①から④の順番で行った。なお、アンケートは全て 2009 年 1 月に実施した。なお、初見のシャドーイング時は、以下の英文題材は手元に渡していない。その後、以下の題材を渡し、その題材の SR を上記の手順の 3.1 で行い、その直後のシャドーイングの際には、その題材は伏せさせる。

題材：*Skills for Better Writing*, 2008 年度版 (p. 29 から一部抜粋) を使用 南曇堂 (レベル：TOEIC 400-600)

Lifetime employment has been a traditional Japanese employment system for a long time. Under this system, once you start to work for one company, you can stay there until retirement. This system had both merits and demerits. The merits of the lifetime employment system are as follows: First, because employees can work without worrying being laid off, they can plan their futures better. Second, the longer they work for the company, the more loyalty they tend to show their company. Long-term employees are more likely to make contributions to their company in many ways. (150 wpm)

5. 通訳訓練法の学習者レベル別のアンケート結果と考察

5.1 SR 訓練の初級学習者からのアンケート結果

対象者：初級学習者 (TOEIC 300 点台) 52 人 (大学 3 年次)

質問内容

A. SR 訓練は、難しいか？

非常に難しい：12人(23%)。やや難しい：23人(44%)。普通：15人(28%)。やや易しい：2人(3.8%)。非常に易しい：0人(0%)

B. Aで答えた理由は？(主なる同様内容の理由を3点挙げる)

1. 自分で行う際にスラッシュの入る箇所が迷う。
2. 語彙力がないために、訳せないことがあり、直ぐに的確な日本語が見つからない。
3. 頭の中で、意味理解の処理がしきれない。

C. SR訓練を行ったことで、改善した点はあるか？あれば記述せよ。(主なる同様内容の理由を3点挙げる)

1. 早く読めるようになった。
2. 英語を読むのが楽しくなり、苦でなくなってきた。
3. 返り読みする癖がなくなった。

5.1.1 初級学習者に対するSR訓練のアンケートからの考察

SR訓練は、初級学習者にとっては、一年間のSR訓練を行った後であっても、半数以上(約67%)が難しい感じる事が分かった。この原因は、スラッシュを入れる的確な場所が分からないことがあるということから判断できるように、文法力が不足しているのが見てとれる。当然のごとく、意味のかたまりを見つけながらスラッシュを入れるに際し、文法力不足ではSRはままならないと同時に、正確に英文理解は不可能であるのは、明白なので、初級学習者に対しては、より詳細に文法事項の説明を加えた上で、SR訓練を行ったほうが良いであろう。また、今回のアンケートのタスクは、学習者レベル別に関わりなく同じ題材である(故意に、レベル別に題材は変えなかった。理由は、初級者であっても筆者がSRでは、訳出をしているので、難しくないと判断したからである)。しかしながら、SRが普通、やや易しい(約31.2%)という感想を述べる学生もおり、また同時に改善点の記述から、早く読めるようになった、返り読みする癖がなくなったということからも判断できるように、少なくとも、初級者であっても、約3割の学生は、SRが慣れてくることが見て取れる。特に、初級者は英語に対するモチベーションも低いことも多いが、檜山(2007)が主張するように、英語を読むことに対

するアレルギー軽減にも奏功するのであれば、初級者にであっても、題材レベルに慎重行いつつ SR 訓練を積極的に導入してよいのではなからうか。その反面、アンケートからも判断できるように、SR を難しいと感じる受講者の方が、やや易しい、普通と感じる学生数を上回っているので、題材レベルの選択には、かなり慎重に行うことが、初級者の SR 訓練導入の際に特に重要であろう。同時に、文法事項に対する分かりやすい説明を加えた上で、SR 訓練が必須になるであろう。

5.2 ST 訓練の初級学習者からのアンケート結果

対象者：上記 5.1 の 52 人の初級学習者に同じ（なお、この学習者群にかんしては、ST は難しい訓練であるので、実際の授業では 3 回のみ訓練に留めた）

質問内容

A. ST は難しいか？

非常に難しい：25 人 (48%)。やや難しい：27 人 (52%)。普通：0 人 (0%)。易しい：0 人 (0%)。非常に易しい：0 人 (0%)。

B. A で答えた理由は？（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. eye span が長いと途中で内容を忘れる。
2. 直ぐに、第三者に理解可能な日本語に変換できない。
3. 瞬時に、文法処理し、意味理解し、日本語に訳すという処理作業が多すぎて、とても難しい。集中力が途切れる。

C. ST 訓練を行ったことで、改善した点はあるか？ あれば記述せよ。（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. 文法力の大切さに気がついた。
2. 語彙力が身につけていなければ、正確な日本語には訳せず、感覚のみではそれがきちんとできないことがわかった。
3. ST 同様、後ろから訳す癖がなくなり、早く読めるようになった気がする。

5.2.1 初級学習者からの ST 訓練のアンケートからの考察

初級学習者においては、52 人全てが非常に難しい、やや難しいとの回答であった。予想はしていたが ST 訓練は、初級者向けではないかといえる。なぜならば、処理作業がかなり多いゆえ、初級学習者にとっては負荷が高いため、処理能力に追いついていかないのではないかと推測できる。また、却って英語恐怖症に誘導させてしまう懸念もある。やはり、ST は、英語の文法構造が正確に理解できているからゆえ、可能な作業であり、言語変換できる余裕も出てくるのであるから、初級者への ST 導入は、無理ともいえるであろう。しかしながら、文法力や語彙力の大切さに気がついたという回答は、初級学習者への気づきの意味でも、全く意義がなかったことではなかったのではなからうか。しかしながら、初級学習者には、ST 訓練の前段階の SR 訓練を中心とした授業が理想的であると結論付ける。

5.3 シャドーイング訓練からのアンケート結果

対象者：上記 SR と ST のアンケート対象者に同じ

質問内容

A. 初見のシャドーイングと SR した後のシャドーイングではどちらが易しいか？

全ての人（52 人）が、ST 後のシャドーイングの方が楽であると答える。

B. A で答えた理由は？

初見のシャドーイングが難しい理由（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. ネイティブ・スピーカーのスピーチが早すぎて、ただ口真似をしているだけで、頭に何も残らない。
2. 意味理解にまで繋がる余裕もない。知らない単語があると、全くついていけない。
3. 頭の中が、混乱し、さっぱり分らない。

SR 後の方が、楽な理由（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. 意味が分かっていると、音声に集中できる余裕ができる。
2. 次にくる文章が予測可能になるので、意味を考えながらシャドーイ

ングできるようになる。

3. 単語と単語のつながり（プロソディ）が予め分かっているほうが、はっきり聞こえる。

5.3.1 シャドーイング訓練に関するアンケートからの考察

初見のシャドーイングは、全ての学生が難しいと回答した。SR 後との比較であるから、当然であるといえれば当然であるが、初級者にとってのシャドーイングは SR を行ってからのシャドーイング訓練を施す方が、シャドーイング本来の有効性が高まるといえよう。対象者の学生全てが、シャドーイング訓練を始めて経験したということは、最初の授業で確認済である。質問に対する理由の項には、記載しなかったが、シャドーイング訓練を覚えたことで、フランス語の学習にも応用しているとの回答も 2 人あった。また、全く今まで経験したことのないシャドーイング訓練を知ることができ、大変であったが、英語が楽しく感じたという回答も多数あった。やはり、input と output をほぼ同時に行うシャドーイングは、心理的な側面からも学習者にとって英語を勉強しているという気持ちを大きくさせるという作用もあるようだ。かなり、負荷の高い訓練であるが、学習者レベルを考慮しつつ、教材を選択し、SR と組み合わせたシャドーイングを初級学習者に導入することは、有効な英語学習の教授法の一つになりえるといえよう。

5.4 SR 訓練の中級者～上級学習者からのアンケート結果

対象者：中級～上級学習者（TOEIC 500 点台～700 点台）157 人（大学 1 年次～4 年次）

質問内容

- A. SR 訓練は、難しいか？

非常に難しい：8 人 (5%)。やや難しい：55 人 (35%)。普通：70 人 (45%)。やや易しい：20 人 (13%)。非常に易しい：4 人 (2%)

- B. A で答えた理由は？（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. スラッシュを入れるかたまりの箇所を見つけて訳す癖がついたの

で、難しくない。

2. 細かく区切ると訳しやすく、日本語訳が、正確でなくてもいいのでやりやすい。
 3. 文法があやふやなので、スラッシュを入れる箇所にまだ自信がなく、今までと違う訳し方（以前に行った事のない訓練）なので難しい。
- C. SR 訓練を行ったことで、改善した点はあるか？ あれば記述せよ。（主なる同様内容の理由を3点挙げる）
1. スラッシュを入れる場所が、以前より鮮明に分かるようになり、早く読めるようになった。
 2. 語彙力がなければ、SR が出来ないので、語彙力の大切さに気がついた。
 3. 返り読みする癖がなくなり、SR して読むようになった。

5.4.1 中級～上級学習者に対する SR 訓練のアンケートからの考察

やはり、初級者と比較すると、SR に対して難しいと感じる割合が減った。60% の学生が SR は普通から易しいという感想を持っていることが、アンケートの結果分かる。しかしながら、40% の学生が、まだ難しいと感じていることも分かった。難しいと感じる学習者の多くが、語彙力のないという感想の記述が多い。このことは、日ごろ多くの英文に接することがないがゆえ、一二度、接した語彙や表現が長期記憶化していないとも取れる（簡潔に述べれば、反復練習していないので、忘れてしまっている）。したがって、SR とともに、学習者には様々な状況場面で対応できるような語彙力をつけるように促すことが肝要になるであろう。文法力に関しては、完璧とはいえないが、スラッシュを入れる箇所が分かるようになったということは、文法力があるからこそ可能であるといえる。また、筆者も SR 訓練の際には、大切な文法事項に簡単な説明を加え、文法知識を自主的につけるように促していることも影響しているのかもしれない。本来、このレベルは、英検であれば2級以上であり、対象者には準1級保持者もいることから、文法指導はあまりしなくてもいいものと当初思っていたが、中・上級学習者においても、文法能力不足は、英作文の課題を課したときに、その低さがはっきりと判明した。

今後は、先述のように文法事項を再確認する指導とともに、多くの英文に触れるためにも、SR 訓練の分量を増やしてもよいのではないだろうか。

5.5 ST 訓練の中級～上級学習者からのアンケート結果

対象者：上記の 157 人の学習者に同じ（なお、ST は難しい訓練であるので後期の授業内に 5 回程度取り入れるに留めた）

質問内容

A. ST は難しいか？

非常に難しい：42 人 (26%)。やや難しい：94 人 (60%)。普通：21 人 (約 13%)。やや易しい：0 人 (0%)。非常に易しい：0 人 (0%)

B. A で答えた理由は？（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. eye span が長くなると、瞬間的に文法把握ができないため、焦ってしまい、きちんとした日本語が思い浮かばなくなる。
2. 単語の核（特に動詞）となる意味を理解していないので、訳す際に柔軟性のある日本語が出てこない。
3. 専門性のない限り、英→日訳はできるが、第三者に伝える正確な日本語を瞬時に口頭出力しようとする、頭が混乱する。

C. ST 訓練を行ったことで、改善した点はあるか？ あれば記述せよ。（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. 文脈から意味推測することを意識するようになった。
2. 正確な日本語力が、自分にはまだないことに気がついた。
3. 語彙力、文法力の大切さが理解できたとともに、それらがなければそもそも通訳はできないことに気がついた。

5.5.1 中～上級学習者に対する ST 訓練のアンケートからの考察

アンケートの結果から、中、上級学習者であっても SR 訓練と ST 訓練を比較し難しいと感じる割合は、前者では、40% であり、後者は 86% と 2 倍以上になることが判明した。SR 訓練中心で ST 訓練は、5 回程しか施さなかったことも原因（つまり、ST に慣れていない）となっていることも考え

られるが、やはり、いずれにせよ、ST は多くの中、上級学習者にとっても難しいのは明白である。ただし、SR をせずに、いきなり ST 訓練を施した授業は行っていないので、はじめから ST を施して、慣らす方法もあるかと思う。これは、通訳訓練の分野では、逐次通訳の前に、同時通訳訓練を行うという方法をとる通訳学校のメソッドに類似している。

先述の通り、SR は 4 割が難しい、ST は約 8 割が難しいという感想から判断して、中、上級者レベルであれば、前期は SR に後期は ST に移行しても、問題はないのではないだろうか。とういうのも、言語学習を一種の訓練と位置づけた場合、当然のごとく慣れも必要になる。したがって、約 8 割の学生が難しいと感想を述べたが、それは感想であるに留まるのであり、容易であると感じるタスクばかりでは、概して、更なる学習効果は望めないので、ST も積極的とはいわないとしても、中、上級学習者にとっては、SR の延長上の訓練として、ST は導入してもよいのではないかと思われる。

5.6 シャドーイング訓練からのアンケート結果

対象者：上記、5.5 及び 5.6 の学習者に同じ

質問内容

A. 初見のシャドーイングと SR した後のシャドーイングではどちらが易しいか？

全ての学生（157 人）が、SR 後のシャドーイングの方が楽であると答える。

B. A で答えた理由は？

初見のシャドーイングが難しい理由（主なる同様内容の理由を 3 点挙げる）

1. 知らない単語があると、思考回路がとまり、口がついていかないし、予想能力が働かない。頭もパンクしそうになる。
2. 理解しようと必死になり過ぎ、どんどん英文だけが先に進み、結局、シャドーイングが出来ない。
3. 一度、集中力が途切れると、何を言っているのか全く分からなくなってしまう。

SR 後の方が、楽な理由（主なる同様内容の理由を3点挙げる）

1. 意味理解後であると、聞くことに集中でき、脳への負担が少なくなるような気がする。
2. 焦っても、意味が入っているので、脳が直ぐにシャドーイングに戻る体勢になる。
3. 予測力が、初見のシャドーイングとは全く違い、脳の中で文章化しながらシャドーイングできる。

5.6.1 シャドーイング訓練に関するアンケートからの考察

初級者同様、全ての中・上級学習者にとっても、SR 後のシャドーイングの方が楽であると、分かった。これは、母語である日本語であっても同様であり、ましてや、母語でない第2言語のシャドーイングは意味理解を済ましたほうが、脳への負荷が低くなるからであろう。しかし、常にSRをした後にシャドーイング訓練を施すには、疑問が残る。なぜならば、シャドーイング自体、脳への負荷が高いのは、経験則で理解できるが、やはり、言語処理は、トップダウン式に推測力を働かせることが必要であるので、常にSR後にシャドーイング訓練を行うのではなく、言語処理に必要なスキーマとしての、語彙力向上、文法力向上をあわせて自発的に促すように指導するほうがよいのではないかと判断する。したがって、更なるシャドーイング効果を引き上げるためには、SR 後のシャドーイング訓練を半期、初見のシャドーイングを半期といったような方法をとったほうが、理想的であるのではなかろうか。

6. むすび

通訳訓練法が、一般の英語教育に導入され始めたのは、まだ最近のことであり、また、その訓練法を授業内で施している英語教師もそう多くはないのも事実である。

また、上記アンケートが示すように、初級学習者にとっては、SR は学習者の英語学習に対するやる気の向上や、自分の不得意部分を発見させるには

有効な教授法の中の一つといつてよいであろうが、ST は、初級者にとっては困難な度合いが高すぎ、英語に対する嫌悪感を助長させてしまう可能性も高いので、初級学習者には、SR 導入に留めておくのが理想的であると結論付ける。同時に、選択する教材も SR では、あまり複雑な構文が含まれた（つまり、文法的に難しすぎる）英文でなく、できるだけ易しめのものを選ぶことも大切であろう。

初級学習者へのシャドーイング訓練に関しては、SR を済ませた題材をシャドーイング訓練するといった順番で行うことが理想であろう。というのも、初見では負荷が初級者には高すぎるからである。しかしながら、シャドーイングは初期学習者にとつても、とても有意義な訓練であるという多数の回答からも判断できるように、積極的に導入してよいと結論付けることができる。ただし、SR と同様、初級者にとっては処理の負担が大きいともいえるので事実で、教材選択も慎重を要し（あまりにも、余りにも難しい語彙が含まれる教材を避けるなど、つまり未知語が多すぎる教材）出来るだけ難しくもないものや、あるいは短いストーリーであるものや、日常会話で使われる表現をシャドーイング訓練に用いるなどの方法も考えられる。また、長時間のシャドーイングは脳への負担が高いので、シャドーイングに時間をあまりに割いてしまうのは、避けたほうがよいと判断する。なぜならば、授業の残りの時間で、受講者の疲労度が高まってしまう懸念があるからである。

中、上級学習者にとつての SR 訓練はさほど困難でないアンケートから見取れるので、SR は積極的に導入してもよいと判断できる。しかしながら、ST にかんしては、8 割以上の中、上級学習者にとつても、難しいというアンケート結果からも判断できるように、SR から ST 訓練への移行の時期を慎重に見極めることが大切であろう。習熟度別のクラス編成であっても、そのレベルは、かなり広いからだ。したがって、SR を前期、ST を後期にというような導入がよいのではないだろうか。その際も、前期の終わりに受講者全員に速読力などを図り、それが低い者へは夏休み中に、SR 訓練の自宅学習課題を与えるなどといった措置も必要となるかも知れない。一方で、本論中でも言及したが、初めから ST を導入するという方法も考えられる。それによって、SR が非常に楽になる可能性もあるからである。この方法が実際に良いか否かは、実際に被験者を使った今後の実験が必要になろう。

最後に、中、初級学習者に対するシャドーイング訓練であるが、SRをした後の方が、当然ながらシャドーイングは楽であるが、常にSR後のシャドーイングばかりでなく、やはり初見のシャドーイング訓練も、中、上級者には必要であろう。これは、TOEICや英検のリスニングテストは、常に初見であるのだから、やはりリスニングには、想像力や推測力を養う訓練も必要だからである。したがって、SR後のシャドーイングと初見のシャドーイングを交互で行う訓練も有効ではなからうか。

シャドーイング訓練にかんしては、リスニング力向上には有効であるという実証研究結果があるが、まだ、科学的にその有効性は分からないので、そういった分野の解明にもとても興味がある。

Kalina (1998) は、逐次通訳の予備訓練として、想起訓練として「クローズ法：cloze exercise」などの導入も強調するが、このような訓練も、第2言語習得としても有効であるであろう。

前述の通り、通訳訓練は通訳のクラスのためのものであるという考えも多く、現在、一般英語への導入はわずかであることは否めない。同時に今後、実施される、英語で英語の授業をするという方向性とはある意味対立する。なぜならば、通訳訓練法は英⇄日の言語変換を求めた教授法であるからである。第2言語習得法には、未だに決定打となる教授法は見出されていないというのが、現実である。そういった中で、通訳訓練法が今後、大学学部レベルの外国語学習者にとって、どの程度有効であるかの脳科学的な実証研究も必要となるであろう。

注

(1) 通常の授業での使用テキスト

初級学習者：*Knowing Yourself, Knowing Japan* 南曇堂 対象レベル：TOEIC 350-450

中級学習者：*A World of Change on the Web* 南曇堂 対象レベル：TOEIC 400-600

上級学習者：*Applying Interpreting Skills to Communication* 南曇堂 対象レベル：TOEIC 500-700

- (2) 通訳学生コンテスト：2007・2008 年度 12 月開催（於：名古屋外国語大学）通訳教育を学部レベルで行っている全国 10 大学の学部生による通訳コンテスト。筆者も大東文化大学外国語学部英語学科の通訳法の受講者からの参加者の引率を行っている。

参考文献

- 田中深雪他 (2007) 「通訳クラス受講生たちの意識調査」『通訳研究』第 7 号、日本通訳学会、253-263 頁。
- 篠塚勝正 (2006) 「リスニング力向上におけるシャドーイングの有効性」『大東文化大学外国語学会誌』第 35 号、193-203 頁。
- 染谷泰正 (2004) 「通訳訓練手法とその一般語学学習者への応用について」『通訳理論研究』論集、日本通訳学会、199-216 頁。
- 玉井健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイング効果に関する研究』風間書房。
- 鶴田知佳子他 (2006) 『Exercise in English—サイトトランスレーションで意味をとらえよう』大阪教育図書。
- 桧山晋 (2007) 「スラッシュ・リーディングについて」『秋田県立大学総合科学研究彙報』第 8 号、57-62 頁。
- Kalina, S. (1992) "Discourse Processing and Interpreting Strategies: An Approach to the Teaching of Interpreting," in Dollerup and Loddegaard (eds.), pp. 251-7.
- Kurz, I. (1992) "Shadowing Exercises in Interpreter Training," in Dollerup and Loddegaard (eds.), pp. 245-50.
- Lambert, S. (1991) "Aptitude Test for Simultaneous Interpretation at the University of Ottawa," *Meta* 36(4), pp. 586-94.
- Seleskovitch, D. and Lederer (1989) *Pedagouge rasione de l'interpretation*, Paris/Brussels: Didier Erudition/OPOCE.